



### 散華の海、郷の山

●プロフィール  
1950年、北海道恵庭市生まれ。83年、札幌に自然食品の店「まほろば」をスタート。無農薬野菜を栽培する自然農園を持ち、オーガニックカフェとパン工房も併設。世界の権威を驚愕させた浄水器「エリクサー」を開発し、その水から世界初の微生物由来の新規乳酸菌を発見、国際特許を取得する。O-1テストを使って独自の商品開発を続ける。著書「後討」

### 宮下周平

自然食品の店「まほろば」主人

(写真中) 昭和19年10月、三重県明野教導飛行師団にて。右、大貫少尉

### 南の高砂の島はるけくも 我が魂永遠に母に抱かる

(大貫健一郎「母へ託すの句」)

とある朝、FMラジオから「風花」という曲が流れた。坂本龍一さん編曲の前奏がポツンポツンと邦楽器を思わせる間合いの中、一人の女性ボーカルが歌い出した時、何故か幼き日のつれづれを思い出した。それは、紛れもない日本の抒情歌であった。その作者が大貫妙子さんと言う方、全くこの方面に疎い私は、ある種鮮烈な思いを抱いた。それからしばらくして彼女が『懐かしき未来』という番組のDJを担当された時、不思議に何時か、まほろばにいらつしやるといふ直感が過ぎった。

それが、奇しくも実現したのは、三年前の夏であった。それから、農園を手伝って頂いたり、買い物やされたり、そして畑の裏山のマンションに住まわれたりと、次々と不思議な巡り合わせが起こった。何時か今住まう亡きご両親の葉山を離れて、札幌の里山に住みたいとまで言われたのだ。

戴いた彼女のエッセイ集『私の暮らしかた』を読み進むうち、「空蟬の夏」の章で、ハタと止まってしまった。以前、彼女より、お父様「大貫健一郎」氏が、特攻隊の生き残り、で、壮絶な半生を送られたことを断片的には聞いていた。しかし、その尋常ならざる実態を知って、「死を見ること帰るが如し」と言った当時の美しい死生観が、粉々に砕かれた思っていた。

「智恵子、会いたい、話したい、無性に……」

出撃を前に、穴澤利夫少尉は、この思いだけで一杯だった。婚約者智恵子さんから贈られたマフラーを戦闘服に確りと締めながら。

「神聖な帽子や剣にはなりたくありませんが、替わるものならあの白いマフラーのように、いつも離れない存在になりたいのです」。彼女の身替りとして肌身につけて散っていた神風の志士。うら若き身空、どれほど生きたかったらうか、どれほど青春を謳歌し、人生を闊歩したかったらうか。

必死必殺「人間爆弾」と言う、異常な軍部の途方もない作戦に、あたら若きイノチが散っていた。特攻を熱望した若者など居なかった。志願せざるを得ない状況に追い込まれたままであった。沖繩特攻に駆り出された大貫氏は、知覧から出撃して、敵機グラマンにタンクを撃ち抜かれたが、間一髪、何故か徳之島に不時着出来た。そして、機体から降りた利那、爆撃で炎上した。命からがら一命を取りとめ喜界島で、救援機に仲間と乗るはずだったが籤引きに敗れ、先に行く搭乗員を見送った。すると突然、上昇した機体は、待ち構えていた夜間敵機に空中爆破せられた。二度、命拾いした。運命は定められていたのか。その時、夜空の彼方に、「健一郎、死んではいけません。お母さんが守ってあげます

特攻を志願するも死ねない運命もある。そんな学徒兵が、何と1276名中605名、半数が帰還したという驚くべき事実を誰が知ろう。その多くが収容所に送り込まれ、氏は福岡「振武寮」に、生きて帰って来たのだ。芳い一言があつても良かった。出迎える微笑があつても良かった。だが、軍参謀の一声「貴様らは、命が惜しい卑怯者、帝国軍人の面汚し」と罵倒され、暴力を浴び、座敷牢に幽閉された。その「許されざる帰還」、特攻隊が生き残っていることは、軍部の恥、国辱だった。死せし軍神を、国賊としてひた隠した。

それよりも「最後の一機で必ず、俺も突入する」と隊員を鼓舞して死出の旅路に送り出した、この狂気の作戦を発令した大軍司令官は戦後、復讐を恐れ護身の拳銃を身に隠しつつ自決も出来ず、遂に九五歳まで生き延びた。草葉の陰で、南海に散華していった若き藩は何を思うか。犠牲と言うには、余りにも虚しく、愚かしい。

何時の世も、何処の地も、一部、上層部の判断が、国民の命運を左右する。この沖繩特攻に陸海空軍約四千機が出撃し、95%が途中、対空砲火で撃墜され、古くお粗末な機体は目標地にさえ届かず海没した。それに比し、沈

零戦、隼、飛燕、紫電改……、グラマン、ヘルキヤット、メッサーシュミット……。子供部屋の天井から釣り下がった戦闘機。戦後10年も過ぎた幼い私にとつて、それは目の色を変えるプラモデルの玩具でしかなかった。その血塗られた一機一機の悲しい歴史など想像しようもなかった。既に戦争は、遠い語り草となっていた。

その後、青年期に岡潔先生から、日本人の死生の潔さを、日本史から学ぶこと、ことに近代において、「特攻」の凄まじい無私の精神を植え付けられた。その父母や兄弟、恋人に送る遺書の純情、その筆墨の跡の見事さ、わずか20歳そこそこの青年が培うべくもない清廉な人格、志操の高潔さに、ただただ胸を打たれるばかりだった。

だが、今知ったことは、それとは余りにもかけ離れた事実だった。

軍の検閲で、国威高揚を損なう遺書は、悉く廃棄せられていた。「きけわだつみのこえ」の清冽なる言葉の外に、捨てられた遺言の絶望的な慟哭を誰が聞きつけるだろう。お国のため、天皇のために死ぬのではない。我が父母のため、家族のため、友のため、故郷のため、と自分に言い聞かせて、止む無く死地に臨む。進んで死に急いだのではない。心の中の恐怖と葛藤に苛まされながら、半ば諦めて逝った。

没損傷した米国の軍艦など、一割にも満たなかった。勝敗は、既に決せられていた。

「大貫よ、俺の無念を晴らしてくれ」とばかりに、氏は亡き同僚・戦友の手向けに、日本行脚を、死の床に就くまで続けられた。青春に刻まれた深き傷跡は一生を支配する。それを癒すには、余りにも深過ぎた。行けども、行けども、傷口は埋まるどころか、その時を取り戻すには、一生は短く、なおも残酷すぎた。戦争はおろか、特攻をも美化してはならない。大貫氏は、歴史の裏側で逝った戦友の悲しみの代弁者として、訴え続けた。戦争の愚かさ、人が人を殺めることの哀しさ。勝つことも、負けることも、二つながら不幸であることを伝えたかった。人類の無明が、戦後七十年を経ても、なおも止まず、世界の各地で惨劇が繰り返されていることに、人間の業の深さを絶望する。だが、原爆を落とされてまで惨敗地を嘗め尽くした日本が、凛として世界に、不戦を、平和を、訴えずして、誰が訴えられるのだろう。

大貫氏は、歴史の生き証人として、我々にそれを伝えたかった。

死してなおも、彼は生きています。

